

## 応募を検討する際に考慮したい事項

(本稿は小西俊雄〈リクルートローカルカウンセラー〉の勤務経験に基づく。)

### ・ 雇用契約は個人の立場で

IAEA 正式ポストは派遣元からの出向者を受け入れるものではなく「個人」として採用する。「親元とは縁を切って」と契約書類に署名する前に注意される。これは「IAEA (一般に国連) 勤務中は派遣元 (国でも会社でも) の利益代表ではなく、国連の為に働く」倫理思想から来る。応募者にとって「帰国後の職場復帰」への不安は消せないだろう。上司と良く相談する事を奨める。一方で「契約は有期だからその後の職場復帰について所属組織と良く相談してから署名しろ」とも注意している。

### ・ 契約期間と定年

契約は IAEA と個々人間でなされ、原則有期契約である。短期コンサルタント等の臨時職を除き通常は三年契約で始まる。「本人の適正と業務上の必要性」があれば、多くの場合は概ね五年へ延長される。有期契約上限は七年 (多少の flexibility はあるようだが) である。「本人の適正と業務上の必要性」を深く考慮して「個々に判断」されるようだ。七年勤務を目指す場合は、日頃の業績と人間関係構築が重要になる。定年年齢は 62。したがって、50 歳代半ば前後以降の人は片道切符 (IAEA で定年を迎える)、帰国後 IAEA での経験を日本で活かすなら 40 歳代後半までが目安になる。30 歳代までなら経験を帰国後活かした後、より高い地位で (例えば部長、課長として) 再度 IAEA に勤める道も開ける。望まれてもいる。「最長七年」は一度の勤務に関してであって、再復帰時に通算される訳ではない。

### ・ 職場としての IAEA

<http://www.iaea.org/About/Jobs/>では応募から採用、職場環境を始め年金、健康保険等に関する一般的な情報も見ることができる。国連独自の年金制度がある。健康保険も幾つかの保険会社と特惠契約の便宜を図っている。私の場合、日本国内の保険と二重に加入したがこれは各人の選択である。私が加入した現地の保険では患者負担 20%だった。私の場合、多少日本との違いを感じたのは、「先ずは 100%を患者が支払い、後日 80%が還付される」手続き上の違いだった。国連内に医療センターがあり、日常の大体はそこで処理できる。そうでない場合、市中の「専門医」を紹介してくれる。

### ・ 言葉の問題

決め手は仕事上の英語能力と考えて良いだろう。上を見ればきりが無いが、上級職 (P4 以上) なら少なくとも英検一級は欲しい。TOEIC なら 850~900 点以上か。採否は資格試験ではないから、「何点あれば合格」とはいかない。職場では「読み書き話す」いずれも大事だが、面接では「きれいに話す」、実務では「書く」ことが重要である。職員としては、会議の席での議論、道筋の通った論理的説明やプレゼンテーション能力が求められる。海外勤務を考えるなら IAEA に限らず必要な技術である。

### ・ 生活の不安?

「不安は適中しない」と言って良い。個人差もあるが概ね生活の質は上がると考えて良い。子女

の教育環境や医療関係等の情報は「ロコミ」が最も信用できる最新情報だろう。周りの経験者に聞くのが最もいいが、いなければ当ホームページ「問い合わせ」でもある程度相談に応ずる。ウィーンの現地語はドイツ語だが、英語も予想以上に通ずる。

人によっては給料の額面が下がる場合があるのも応募者数を抑えている心理的要因だろう。が給料は非課税だし、一定の範囲で学童の教育手当、住宅費補助の制度もある。さらに一定の制限内でガソリン税、電気ガス等の税金、消費税分も戻ってくる等の特典が適用されるケースもある。通勤手当はないが、ウィーン市内は、タクシー以外は全て市交通局直営である。バス、地下鉄、トラム、通勤電車等が約45000円の年間定期で乗り放題だから結局割安である。

日本よりは安く生活できる社会構造である。詳述する余裕はないが、オーストリアもウィーンも「小さい社会の良さ」を活かしている。産直品が多く中間経費がミニマムで、「左党」の人も¥3000あれば地元の飲み屋で心置きなく飲食できる。

「生活の不安」を感じず方には「逆に芸術、自然等楽しみは一杯」だから「生活の質は上がる」と申し上げて良い。その証拠に、任務を終えて離任する日本人の9分9厘は「もっといたい、また来たい」といって帰途に着く。